遠い夏の日／今日の夏の日

御神楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い夏の日／今日の夏の日

【Ｎコード】

Ｎ２５７１ＢＡ

【作者名】

御神楽

【あらすじ】

自作短編小説です。他サイトにも投稿しております。

時折思い出す。

まだ少年だった日の事を。まだ夢を見ていた日々を。

生意気にも学校をサボり、そして彼女に出会ったあの日の事を。

暑くて、眩しかった。そんな、遠い夏の日の事を――

――いまでもそれは、きらきらと輝いている。

■

空気が暑かった。地面が熱かった。今年の夏で恐らく一番アツい日だった。

そのアツさを鮮明に覚えている。そんな日だったからこそ、私は学校をサボったのだ。

親には学校に行く、と言い家を出た。しかし、向かった先は人気のない小さな無人の神社。

そこはこれよりもずっと幼い時に遊んでいた、秘密の場所だった。

そこで私は只管にボーっと佇んでいた。

別段することもなかったし、なにより暑くて動く気にもならなかったからだ。

そんな時だ。

軽快な足取りで私の前に彼女が現れたのは――

「あなた、暇ならあたしに付き合ってくれない？」

立派な着物を着た、育ちのよさそうな女の子だった。

年齢は私と同じか、すこし下というほどか。どちらにしても、こんな朽ちた神社には不釣り合いな風貌だ。

そんな彼女がいきなり話しかけてきたのだから、あまり女子と関わりを持ってこなかった私は当然狼狽した。

しどろもどろしている私を彼女はふふっ、と笑う。

「学校サボってる割には、不良って感じじゃないわね。あなた」

そして彼女はまた笑う。

その笑顔が年相応のそれより、とても大人びていて綺麗だった。

見惚れていた私の手を彼女は強引に引っ張る。

私はまだ何も答えていないのに、だ。どうやら、見た目に反して短気のようだ。

それに反抗することもなくついていく私もどうかと思ったが・・・。

彼女に導かれるまま、私は神社を出て、商店街にとび出した。

なぜ、こんなとこに来たのだろうと首を捻っていると彼女は困ったように呟く。

「・・・・・・ま、迷った」

芸人よろしく、盛大にスッ転んだ。

今思えばよくやったと思う。商店街のど真ん中で、綺麗な着物の女の子の隣で。

「なにしてんのよ、あなた。・・・芸人なの？」

「違うよ！」

今まで彼女に圧されっぱなしだったが、やっと言葉が出た。

第一声がツッコミとは思いもしなかったけど。

「・・・・・・あなた、喋れたのね。ビックリ」

喋れないと思われていたようだ。

いや、何も言わなかったので仕方ない。

「迷ったってことは、どこか目的地があったんでしょ？教えてよ、知ってれば案内するよ」

なかなか話が進まなかったので、仕方なく私は聞いた。

彼女は綺麗で可愛いけど、性格は苦手なタイプだった。

強引で力強い、そんな人は苦手だ。自分の弱さが嫌でもわかってしまうから・・・。

だから、私はこの時、早く彼女から解放されたかった。

「う～～～ん、それがあたしにもわからないのよ。昔、一回行っただけだから・・・」

「なら、どういう所？なにがあったの？」

「よく覚えてないけど、夕日が綺麗な場所だった。かな？」

夕日なんてどこで見ても大概綺麗だ。と思ったけど言うとなにかさ

れそうなのでそっと心の中に仕舞っておいた。

「ま、そこら辺歩いていれば思い出すでしょ！・・・というわけで、レッツゴー！」

「うわ、いきなり引っ張んないでよ！」

「それくらいで騒がない、あなた男でしょ？」

「実は女なんだ」

「嘘っ！？」

「冗――」

勿論冗談で、すぐ訂正しようとしたけど、それよりも早く彼女は私

の股間を掴みかかった。

「・・・ん、なんだやっぱり男じゃない」

「な、な、な・・・」

言葉が出なかったのは言うまでもない。

どうやら彼女には冗談は通じないらしい。益々苦手なタイプだ。

それから私が立ち直るのに数分の時間が掛った。

・　・　・

暫く、私達は歩き続けた。

商店街、林道、脇道、獣道。とにかく私が知っていた場所は所構わず踏破した。

けれど、彼女が探す“夕日が綺麗な場所”は見つからなかった。私は途方に暮れていた。

学校をサボってまで、一体なにをしているのだろう。そんなことをぐるぐると思いながら、

案内しているのは私だというのに先行する彼女の後をひたすらに追った。すこし前から会話はない。

それ以前は煩わしいほど話掛けてきた彼女だったけど、いつしかその口は閉ざされていた。どうも調子が狂う。

彼女と出会ってからわずか数時間。それでもすこしは理解してきた。彼女のこと、性格、口調、その他のものも。

彼女は多弁だ。よく喋る。本当にさっきまでは絶えず喋り続けていたんだ。なのに、それがぱったり止んだ。そりゃ、疲れたのだと思うけど。

ただ、私としては調子を狂わされる結果となった。だから、意を決して話しかけてみようと思った。おしゃべりは苦手だけど、それでも無言の気まずさも苦手だ。

「ねぇ、なんでその場所を探してるの？」

できるだけ自然に、噛まないようにゆっくりと丁寧に言った。

歩き辛そうな格好にも関わらず悠然と進む彼女は動きを止め、振り返る。

すこしだけ、汗を掻いていた。

「別に・・・、ただもう一度見てみたいって思ったの。・・・・・・昔、お父さんと一緒に行ったところなんだけど。小さい時のことだったから、忘れちゃって」

大した理由じゃない、と彼女は続けて言った。

その顔は別に、本当にどうでもいいような表情をしていたけど、ただ私はそれだけの理由じゃないことを理解した。

なんとなくだけど、彼女は嘘が下手そうだから。彼女が言うのは本当のことだけ。だから、秘密にしたい事は言わない。それだけだ。

時間は昼間。お天道様が真上にあるということは、誤差を省いて二時というところか・・・。

私も彼女も、汗を掻いていた。今日は暑い。シャツが汗ではっつき、気持ちが悪い。和服を着ている彼女はもっと暑いことだろう。

それでも彼女は優雅に休んでいた。私のようにうねることもなく、正座して木陰で汗が引くのを待っていた。こうしていればお嬢様なのだが、と愚痴が零れる。

そんな彼女に私は飲み物を奢ってあげた。丁度良く自販機もあったのは行幸だった。

「はい・・・。暑いでしょ、飲みなよ」

「え・・・、ん、うん。ありがと」

ぎこちない返事で、ぎこちなく受け取る彼女。すこしおかしかったけど、そんな彼女が可愛く思えた。

ドキッとする。いつの間にか、私は彼女に惚れていたのかもしれない。あまり女子と接点がなかったから、こういう免疫がないのだ。

とはいえ、自制は出来る。こんな男に惚れられても、彼女は迷惑だろう。まぁ、一時の気の迷いさ。私はそう思おうとした。

「ね、ねぇ・・・、これどうやって開けるの？」

すこし思考の海に飛び込んでいた私は彼女の言葉で目が覚める。

彼女はカンを相手に悪戦苦闘していた。スチール缶を手刀で叩き割ろうともしていた。

慌てて取り上げて、ブルタブをあけて渡した。「おおぅ」と感嘆の声を上げるとお茶を啜り始めた。

驚くのを忘れて、呆れる。見た目どおりの箱入り娘を言う奴だった。

・・・でも、困った事に、それが、そんな彼女が可愛かった。

惚れ易いにもほどがある。自身を恥じる。あぁ、私はこんなに軟派だったのかと責めた。

お茶を飲み終えた彼女はサッと立ち上がると、私の顔に顔を近づけて言う。

「――あたしと、恋、してみない？」

突然だった。理解できなくて、理解した時、驚いた。

困惑。困惑していた。というより判らなかった。その言葉にじゃない。意味にじゃない。

なぜ、いきなりそう発言する彼女の意図が判らなかった。いや、彼

女だって年頃だし、色恋に興味があるのはわかる。

それは理解しよう。だが、さて、まだ会って間もない相手に言うことか。そこまで彼女は飢えているというのか。

ない。結論を出す。そんなことはない。ああ、だというのに私は赤面していた。自分でもわかった。頬が熱い。

夏の暑さを越える熱さだ。彼女の目を見る。本気の目。冗談などではない。というより嘘は吐かないだろうと思ってる。

なら、彼女は本当に、言ってる？

「あ、あ、あ、えっ、じ、じゃぁ、よろしくお願いします」

気付けば私は頷いていた。

その途端、彼女の顔が華やいだ。笑顔。眩しい笑顔。夏の日差しに負けない笑顔だった。

◇◇◇

それからも私達は探し続けた。

「恋をしよう」と言われ、頷いたけれど、二人揃ってよくわかっていなかったからだ。

とりあえず歩いて、探して、疲れたら休んで。そんな感じで、時間は過ぎていった。もう日は傾いてきている。

私達は高台の丘。展望台がある場所で休んでいた。とはいえ、ここも彼女曰く「探してる場所じゃない」らしい。

けれど、疲労も蓄積していたし、日が暮れる。これ以上探索するのは危険だった。だから私はとりあえず夕日を眺めたら、今日は解散しようと提案するつもりだった。

とはいえ、夕日を眺めて、すこしでも恋っぽいことをしたかったという僅かな欲望もあったのも事実なのだけど。

やがて、日が地平線へと沈んでいく。

綺麗だった。下に見える町を赤く染めて、夕日は私達すら赤く染め上げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おぉ」

そんな場景を前に、私は綺麗とも言えず、ただ気道から出てきた空

気を振るわせることしかできなかった。

横にいる彼女はなにか納得したような、そんな穏やかな表情をしていた。そして、静かに夕日を見つめ続けていた。

日は落ちた。いきなり空は暗くなる。

放心していた私は、我を取り戻し、提案をしようと彼女を見る。

既に彼女も私を見ていた。ふいに目が合う。そらしたいと思ったけど、真っ直ぐ射抜く彼女の視線がそれをさせてくれない。

「ごめん。わかった、やっとわかったわ」

彼女は言った。的を得ない謝罪と会得したという言葉。

私は首を傾げる。言葉はなかった。

「別に、本当に、どこでもよかっただ。ただ、好きな人と一緒に夕日を眺められれば・・・」

頬に涙が伝う。泣いていた。

私は困惑する。どうしていいかわからない。

「ふふっ・・・、ごめん。本当に、ありがとう。あなたは、あたしの初恋だったわ」

今度は微笑む。もう満足したような表情で。

タン、と彼女は一歩踏み出して、私に・・・・・・キスをした。

柔らかい唇が、唇に触れる。体が固まったような錯覚を覚えた。

それも一瞬で解けると、彼女は身を引いた。

「えへへ・・・・・・、わりと照れるね。――それじゃ、もう、さよならしなきゃ」

「・・・・・・・えっ？」

やっと声が出た。

彼女はクルッと後ろを向くと走った。いきなりすぎて、私にはその後を追うことができなかった。

そして、展望台の出口のところで立ち止まると、またこちらに振り返った。

「じゃぁねっ！ありがとー！本当に、今日は、楽しかったよーーー！！」

さっきの涙が嘘みたいに彼女は手を振って、叫ぶ。

私はそれにつられて、手をふりかえした。よくわかってなかったけど、それでも振った。

やがて、彼女は駆け足で私の視界から消えていった。そこでやっと私は彼女を追い始めた。

まだ時間的には危なくないが、もう真っ暗になった道を一人にするのは危険だと思ったからだ。

けれど、散々探し回っても彼女は見つからなかった。でも、これだけ探していないのなら無事に町まで辿り着けたと考えていいだろう。

そう思い。私は安心して帰路に着いた。

・　・　・

次の日、私はまた学校をサボった。

彼女に会いたかったからだ。昨日のように、行き着けの神社でボーっとしていた。

だが、いつまで経っても彼女はこなかった。当然だ。約束などしていない。けど、探しにいこうにも私は彼女のことを何も知らなかった。

住所も、通っている学校も、名前すら聞いていなかった。プルタブの空け方を知らないのも、唇の感触だって知っているのに、私はなにもわからなかった。

それでも、いつか。いつかは、と。定期的に学校をサボって、私は神社に通い続けた。けれど、彼女は現れない。

だが、待ち続けた。季節が変わって、歳が変わって、生活が変わって、生き方も変わって、けど、これだけはやめなかった。

気付けば、私は大人になっていた。

仕事も始めた。

忙しい。忙しすぎる時間の中、私は神社に通った。

その頃には、もう諦めてはいた。「初恋は実らないものだ」と友人に言われた。それには納得した。

ただ、「お前はいいとこのお嬢さんに遊ばれたんだよ」と言われた時は憤慨した。それだけは絶対にない。

確信も、確証もないけれど。けれど、彼女が嘘を吐くなんて思えなかった。考えられなかった。それだけは信じ続けた。

また月日が過ぎても、まだ通い続けていた。

その頃、やっと私は彼女の情報を掴んだ。彼女の名前は『有沢　優華』というらしい。

大企業有沢重工の息女だった。彼女は本当のお嬢様だった。それは

いい。・・・彼女は既に結婚していた。

それも十六の時に、だ。有沢重工の社長だった彼女の父は、彼女が幼い時に亡くなっていた。

彼が亡くなった後、有沢重工の経営は傾き始めていたらしい。その為、資金融資を条件にある企業の子息を婿へ招いたという話だった。

有沢家には彼女一人しか、子供がいなかった。必然的に、彼女へと白羽の矢が発たされ、結婚した。政略結婚、という奴だった。

もしも、あの時の彼女が十六だったと、そうだと、考えるなら、あれは。私との出会いは、唯一の我が儘だったのかもしれない。

父が築いた会社を守る為、その身を捧げた彼女の。・・・ただ唯一の抵抗だった。そう私は思った。

住所はわかった。今、彼女が居る場所がわかった。けれど、私は行かなかった。

いや、行けなかった。それもまた、彼女に迷惑しかもたらさない。迷惑と知って、自分の気持ちを伝えようなど。

私にとっては笑わせることでしかない。そんな身勝手など、傲慢だの我が儘だのの領域ではない。ただの悪だ。

だから、私は待ち続けることにした。あの神社で、あの場所で、彼女と出会うその日を――

——————————————————————————————

——————————————————————————————

————————————————————

私は待っていた。

何年、何十年という時を。緩やかに変わりゆく風景を、ただ眺め続けた。

もうかつての神社の面影も無い。古びた、壊れかけた神社。そこにまた年老い、弱りきった私がいた。

仕事は既にやめていた。もう歳だったし、死ぬまでは生きていける金は用意してある。

日がな一日、ここでただ彼女を待つだけの日々。・・・・・・なぜ私は彼女を待ち続けるのか。

彼女に会いたいから？否。彼女に愛されたいから？否。彼女を愛したいから？否。

私はただ想い続けているだけ。あの日の彼女を。私との初恋で満足し、人生を捧げた彼女を。

なら、私もこの初恋を彼女へと捧げるべきなんだ。人生を賭けて、捧げ続ける。・・・きっと馬鹿だって、怒るだろう。

ああ、それでも構わなかった。だとしたら、私も馬鹿だって、怒ってやるんだ。――――そんな、淡い幻想を抱いて、私は待つ。

眺めていた風景に一人、誰かが近づいてくる。

視力の落ちた私の目では、よく見えない。近づいて、やっと像がはっきりとする。

私はハッと息を呑んだ。・・・・・・彼女だった。あの日のまんまの、彼女が目の前に立っていた。

――だからこそ、それは彼女ではなかった。

「こんにちわ」

「えぇ、こんにちわ」

彼女・・・、いや少女は言う。平凡な挨拶。

私もそれに習い、返答する。

「・・・・・・。あの、祖母のお知り合い、ですねよ?」

「あなたの言う祖母が有沢優華さんなら、そうですよ」

そこで少女はホッと安堵する。

私といえば、納得していた。これだけ似ているのだから、他人ということはないだろうと。

それから少女は、俯きながら、呟くように言う。

「先日・・・、祖母が亡くなりました。今日は、祖母の遺言でここ

にきました。・・・あなたに手紙があります」

「・・・・・・はい」

私は頷いた。

驚きはない。私達はもう、そういう歳だ。仕方の無いこと、避けられないことだ。

だから、納得した。けれど、やはり、すこし淋しいものがあったのも事実だった。

「祖母からの手紙です」

少女から手紙を受け取る。

宛てもない、真っ白の便箋。その中に、綺麗な字で書かれた羅列があった。

――『今まで、ありがとう。もう、十分。あなたの想いは伝わりました。だから、今度はあたしがあなたを待ちます。

あたしを待った時間と同じくらい、この世界で生きて、そしてあたしに会いにきてください。いつまでも、待っています』

思わず微笑んでしまう。

彼女は私を見ていたんだ。ここで待っていることを知っていたんだ。

私の想いは、ちゃんと彼女へ届いていた・・・。あぁ、そのことがなにより嬉しい。

何十年ぶりかの、涙が出てきた。

こんな老人になっても、やはり涙は枯れないものなんだ。

この歳になって、初めて実感する喜び。私は今、充足していた。

「初恋は叶わない」けれど、結んだ想いはここにあった。

さぁ、泣いてなど居られない。

待っていても、もう彼女は訪れない。

なら、行こう。散々、生きて、そして会いに行く。

その為に、私は重くなった腰を上げ、しっかりと地に足を付けた。

ともあれ、わざわざこんな私に届け物をしてくれた天使にお礼でもしよう。

さて、どうしたものか・・・。ああ、そうだ。そうしよう。

「お嬢さん、暇なら私に付き合ってくれないかい？」

天を仰ぎ、空を見る。

まだまだ空は青いまま、それでもいつかは赤くなる。

奇しくも今日はあの日と同じ、日差しの眩しい今年で一番暑い日だった。

fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2571ba/

遠い夏の日／今日の夏の日

2012年1月6日16時49分発行